

幼児はいかに過去を語るか
—昨日を想起する—

小坂 圭子

How Do Children Talk about Their Past?:
Remembering the Previous Day

Keiko Kosaka

This study examined the developmental changes in preschoolers' narratives about their past events. Sixty-six kindergarten children aged 5 and 6 were requested to recall what they had experienced on the previous day as much as they could. Collected narratives were analyzed from two viewpoints, voluntariness of narratives providing and variation of narrative contents. Results showed that younger children gave simple answers to experimenter's questions, although older children made more detailed answers and sometimes spontaneously provided more information than what they had been asked for. Moreover, younger children simply recalled daily activities with their friends in kindergarten according to "kindergarten script", whereas older children recalled various experiences in various situations beyond the script. These results suggested that six-year-old children's narratives about their past events start to be freed from here and now situations, and the events stored in their memories will constitute their autobiographical memories.

Key words: narratives, remembering, script, young children

生涯最初の記憶はおおよそ3歳を境に出現するといわれており、成人が3歳半から4歳以前のことを思い出すのは困難である(Pillemer & White, 1989)とされている。このことは、自らの幼少期を振り返り想起を試みることを通して、誰もが1度は経験し実感したことがあるかと思われる。このような、概ね3歳以前の自伝的記憶が欠落する現象は“幼児期健忘症”(フロイト, 1970)と呼ばれ、自伝的記憶のメカニズムを解明する手がかりを与える現象として注目されてきた(高木, 1996)。

なぜこのような現象が生じるのか。幼児期健忘症を説明する有力な仮説として広く知られているのが Nelson(1988)のスクリプト説である。彼女は、エミリーという女児を対象に、1歳9ヶ月から3歳の間の独り言を採集した。独り言の内容は、日常的に生起するルーティン(例えば、ベビーシッターのところへ行

く、幼稚園へ行くなど)がほとんど占めていた。時には、ルーティンから逸脱する出来事(例えば、家の車が壊れたのでいつもとは違う車で幼稚園に行ったなど)も語られたが、それらの逸脱が、3ヶ月を過ぎて後に再び語られることはほとんどなかった。子どもは、まず、毎日繰り返される日常の出来事から記憶し、その後、日常スクリプトから逸脱するような個々の出来事を記憶し始めるのである。換言すれば、3歳半から4歳までは、経験内容に関する全ての情報が包括的な(generic)記憶システムに取り入れられる。そのため、この時期の幼児は、意味記憶や要点の記憶(gist memory)、またはスキーマ化された出来事の記憶もとに得られる断片的な記憶のみしか持ち得ず、個々のイベントに関するエピソード記憶は存在しない(Nelson, 1996)ということになる。

しかし、記憶の体制化が優先され、新奇な、または特殊な出来事は忘却されるという Nelson の説に異議を唱える研究もある。Fivush, Gray, & Fromhoff(1987)

は、繰り返されない新奇な出来事が消失するとは限らないことを示した。彼らは、2歳5ヶ月-2歳11ヶ月児を対象に、3ヶ月以内に起こった近い出来事(recent past)と3ヶ月以前に起こった遠い出来事(distant past)についてインタビューを行った。その結果、遠い出来事であっても、近い出来事と同程度に、正確且つ構造的に想起された。また、2-4歳児が、特殊な出来事について正確且つ詳細に再生すること(Sheingold & Tenny, 1982; Hudson, 1990 など)や、3-4歳児が、1-2歳児に経験した出来事を詳しく再生すること(Fivush & Hamond, 1990)が確認されている。このように、スクリプト説の限界を指摘するFivushらが提言するのが、自伝的記憶の発生に寄与する語りの行為である。

Fivush, Haden, & Adam(1995)は、イベント記憶が自伝的記憶になるには、(1)自己を意識する感覚(sense of self)と、(2)記憶を語り合うことばと語り合う場の実現を待たなければならないとした。前者の自己感覚に関しては、鏡再認(mirror recognition)課題などから観察される認識自己(cognitive self)(Howe & Courage, 1993)や、時間を超えて存在する自己への気づきに基づく語りの自己(narrative self)(Fivush, 1988)など、異なる理論的立場からの提言があるが、自己感覚が確立する以前に起こった出来事が自伝的記憶の一部になることはないという点で一致している(Fivush et al., 1995)。一方、後者は、他者との間で語られた出来事が自伝的記憶となり得るという考え方である。従って、語りを通して他人と共有することができない記憶は特に消失しやすいとされる。これは、記憶の社会性を強調した見解とみなされよう。

松島(1994)は、記憶の臨界期をもたらすのは、単なる記憶能力の差異ではなく、“過去の自己”への気づきや意識化の獲得も、その一契機となると考えた。その“過去の自己”は、家庭での対話を通して社会的に“学習”される。松島(1994)は、Fivush et al.(1995)のいう(1)自己の意識化と(2)語りの場は並列的にあるものではなく、(1)自己の意識化においても、(2)語りの場が不可欠であるという両者の興味深い関係性を示唆しているといえよう。

語る(もしくは語り合う)という社会的行為(矢野, 1988)を介して記憶を再構成する場として、子どもたちが最初に参加するのは家庭である。家庭での語り、子ども自身の語りや想起の在り方がある程度方向づけることを、多くの研究が示している(Eisenberg, 1985; Fivush, 1991; Hirst & Manier, 1996; Hudson, 1990 など)。では、学習された過去の語りや家庭以外の場で試みられるのはいつ頃なのであろうか。また、それはどこで、どのようにして実現され

るのであろうか。本研究では、家族以外の他者に過去を語る機会が増す場として園生活を取り上げる。園生活の開始は、家庭と園という異なる社会生活の場を一日の中で共有する生活の開始でもある。主たる活動の場が複数存在することにより、“今、ここ”で活動している自分と、別のいずれかの場所で活動している自分とを識別して捉えることが可能となると思われる。それは、“今、ここ”に存在していながらも、別の場所で活動する自分について語る状況を生み出すであろう。そして、そうした語り経験は、園生活の経過に伴って増加していくと推測される。また、想起を求めるのは近い過去である“昨日”の出来事とした。それは、過去に溯る程度を統一するためであり、加えて、幼児が瞬時に溯ることが可能な範囲であると考えたことによる。

Nelson(1988)のスクリプト説と、Fivush et al.(1995)や松島(1994)の語り行為説とを考え併せ、以下の仮説を設定する。年中児は、“幼稚園スクリプト”(Fivush, 1984; 藤崎, 1995)の確立途上段階にあるため“今、ここ”の園生活から離れた想起を行うのは困難であり、また、自己を語るという行為についても習熟途上にある。よって、自分が今いる幼稚園において、日々経験しているルーティン化した出来事を受動的に語るであろう。対して年長児は、年中児に比して“幼稚園スクリプト”も確立され、自己を語る行為にも馴染んでいると推測される。よって、各個人に特殊な出来事を自発的に語るであろう。

本研究は、自伝的記憶の発生の臨界期にあるであろう幼稚園児が、幼稚園で、昨日の出来事を語るときに、どのような語りの傾向を示すのかを探るものである。年中児は、“幼稚園スクリプト”に還元されるような園生活における日々のルーティンを受動的に語るのに対し、年長児は、“幼稚園スクリプト”を離れたより個別的なエピソードを語るという仮説のもとに、調査を実施する。

方法

1. 被験児 H市内の幼稚園年中児35名(男児17名、女児18名)及び年長児31名(男児16名、女児15名)。
2. 手続き 語りの収集は自由遊び時間に個別に行った。まず、対象児が1人もしくは少人数で遊んでいる時を見計らいラポールを形成し、その後、「昨日あったことをお話ししてくれる?」と切り出した。収集過程においては適宜促しを加えた。語りはカセットレコーダで記録された。音声記録内容を文字化したものを分析対象とした。

Table 1 本研究で用いた発話の分類カテゴリー

I 場所	(a) 幼稚園	(b) 自宅	(c) その他
II 登場人物	(a) 友達・先生	(b) 家族	(c) その他
III 行為	(a) 幼稚園での遊び	(b) 幼稚園での行事	(c) その他

3. 語り内容の分類 子どもの語りを単一の話話が終結するまでのトピックに分け、それから各トピックをアイデアユニット(以下IUと表記)に分けた。各トピック及びIUの内容をTable 1に示すカテゴリーに分類した。カテゴリーは、予備的な観察で得られた語り内容に基づいて設定した。場所及び行為はトピックに基づいて分類し、登場人物は語りに登場する延べ人数を算出した。

結果

1. 語り行為の自発性 一ターン数とIU数の分析

語り収集者からの質問に対して対象児が言語的に応答した場合を1ターンとし、そのターン内でのIU数を年齢別に算出した。ターン数に年齢差はなかった(年中児; M=3.1回, 年長児; M=3.5回)。しかし、1ターンあたりのIU数に有意な差異がみられ(Figure 1参照), 残差分析の結果, 1ターン1IUで完結する語り(例えば「昨日あったことをお話ししてくれる?」「忘れた。’)は年中児の方が多く($\chi^2 = 4.13, df = 2, p < 0.01$), 1ターン3IU以上の語り(例えば「昨日あったことをお話ししてくれる?」「Kくんちに行った。テレビゲームとか, 外で遊んだりとか, お菓子食べたりとか, それで, 何だったっけ…。おもちゃで遊んだりとか…。そんで, おうちへ帰った。’)は年長児の方が多かった($\chi^2 = 3.68, df = 2, p < 0.01$)。

ターン数には年齢差がなかったが, 1ターンあたりのIU数には年齢差が認められた。年中児は1ターン1IUパターンが多かった。これは, 年中児と収集

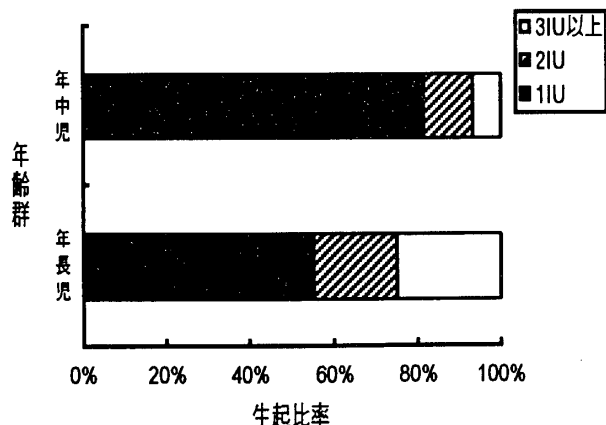


Figure 1 ターン当たりのIU数の生起比率

者とのやりとりが, 収集者からの質問とそれに対する簡略な回答というルーティンに終始していることを示している。年中児は, 会話の相手からの質問や促しがないと語り続けることができにくいものと思われる。一方, 1ターン3IU以上のパターンは年長児により多く見受けられた。年長児は, 収集者との一問一答に留まらず, 自発的に語り続けることができるといえよう。

2. 語り内容の解放性

全トピック及びIUを年齢別にカテゴリーに分類した(Figure 2参照)。上位カテゴリー別に, 年齢2(年中児, 年長児)×下位カテゴリー3((a), (b), (c))の χ^2 検定を行った結果, いずれも有意差はみられなかった。上位カテゴリー別, 年齢別に, 下位カテゴリーの出現頻度を比較した結果, 場所の年長児($\chi^2 = 19.50, df = 2, p < 0.001$), 登場人物の年中児($\chi^2 = 16.29, df = 2, p < 0.001$)と年長児($\chi^2 = 31.05, df = 2, p < 0.001$)に有意差が, 行為の年長児($\chi^2 = 5.07, df = 2, p < 0.1$)に有意な傾向がみられた。場所の年長児では(b)自宅, (c)その他よりも(a)幼稚園が多く, 登場人物の年中児では(c)その他よりも(a)友達・先生, (b)家族が多く, 年長児では多い順から(a)友達・先生, (b)家族, (c)その他となり, 行為の年長児では(b)幼稚園での行事よりも(c)その他が多く出現した。以下, 語りの内容にみられる年齢差について上位カテゴリー別に考察をする。

場所については, 「昨日あったことをお話ししてくれる?」というインタビューの開始からわかるように, 想起場所の指定はしていない。それにもかかわらず, 年齢を通じて(a)幼稚園の出現頻度が多かった。

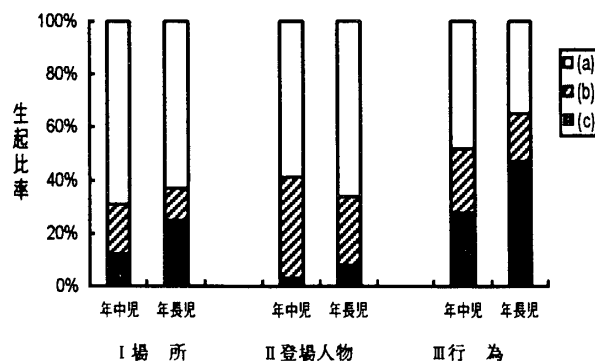


Figure 2 各発話カテゴリーの生起比率

これは、想起を求められた場所が幼稚園であったことにも一部起因すると思われる。“昨日”というつかみどころのない対象を語ろうとするときに、最も手近な“今、ここ”の状況を足がかりとするのも頷ける。一方で、統計的に有意ではないが(c)その他の頻度が年長児で多くなった。具体的には、友達の家、親戚の家、自動車の中、柔道やプールといった稽古ごとの場所などがあり、かなり特殊な場所もちらほらしている。これらの傾向は、自分が“今、ここ”に存在している園という場所に制約されない想起の萌芽を示していると考えられる。

登場人物は、年齢を通じて(a)幼稚園の友達・先生の出現頻度が多かった。想起の場所が(a)幼稚園であれば、その場所で深く関わる人物が登場することは容易に想像できる。ただ、年中児は“みんな”や“お友達”という集合名詞を用いて語ることが多かったが、年長児になると友達の名前を1人1人列挙する事例が多くなった。これは、同級の幼児に対する認識が、“幼稚園にいる同年齢の他者一般”というスキーマ的なものから、各々個性を持ち、また個人的な関わり程度の異なる個人の集まりへと移り変わる過程を反映しているとも捉えられよう。

行為の(a)幼稚園での遊びについて、出現頻度に有意な年齢差はないものの、内容には興味深い相違がみられた。年中児は“幼稚園で遊んだ”と語り、具体的に挙げられる遊びは、例えば女兒の“おままごと”のように限られていた。一方で年長児は、土のだんごを作る、スクーターに乗る、花いちもんめ、どろぼうごっこ、野球など、語られる遊びは、より具体的且つ個別的なものとなった。加齢に伴って内容が“詳細化”しているといえよう。この違いにも、経験した出来事が幼稚園スクリプトへと集約される程度が伺える。年中児は、“幼稚園で遊ぶ”という枠組み的な認識であれば想起可能であるし、遊びの定番であるおままごとなどは思い出して語ることができるが、それ以上の想起は難しい。しかし、年長児になると、幼稚園という枠組みにとらわれすぎることなく各個人に特有の遊びを想起することが可能となる。遊びは、幼稚園という場所との強固なリンクから放たれ、自分自身とリンクするものとなる。加えて、行為(c)その他が登場する割合も年長児に多くなっている。具体的には、自宅や友達の家での遊び、おでかけ、きょうだいとのやり取り、お稽古ごと、病気などがあつた。加齢に伴う内容の“多岐分化”が生じている。彼らの想起は、幼稚園スクリプトに制約されない広がりを持ち始めているといえよう。

総じて、加齢に伴い幼稚園スクリプトに引きずら

れない想起が可能となっている。このことから、日常的なスクリプトが形成された後に、日常から離れた特別な出来事が意識され、記憶される(Nelson, 1988)というスクリプトの形成とその機能を伺うことができよう。

以下、収集された事例をいくつか紹介するが、上述した年齢差傾向の確認はもとより、量的分析を試みようとした途端に、はじき出されてしまう子どもたちの語りの息吹のようなものをすくい上げ、解釈を加えることを試みたい。

1. 幼稚園での遊び

【年中男児】

…中略…

「昨日は何して遊んだ？」

う～ん、忍者ごっこ。

「誰と？」

Nくんと…

「誰と忍者ごっこした？」

……Nくんと。

「ふ～ん、おもしろかった？」

うん。

【年中女児 1】

…中略…

「昨日ねえ、何して遊んだ？」

お…おままごこ。

「おままごと？」

うん。

「誰としましたか？」

みんなとあっちで。

(聞き取りにくかったので)「ん？誰と？」

先生とお友達で。

「あ、ほんとう。楽しかったですか？」

楽しかったです。

【年中女児 2】

「昨日あったことをお話ししてくれる？」

…忘れた。

「忘れたな。じゃあ昨日は、何して遊んだ？」

…そりゃあ、ここで遊んだよね。

「誰と？」

…あの3人と。(と、隣にいる女兒を指差す)

「この3人と？楽しかったですか？」

(肯く)

【年中女兒 3】

「昨日あったことをお話ししてくれる？」
…動物園。
「動物園？動物園で？動物園して遊んだん？」
（肯く）
「誰と？」
（無言で考えている様子）
「誰と遊んだん？」
…うんとお、みんな。
「みんな？面白かったですか？」
（肯く）

【年長男児】

「昨日あったことをお話ししてくれる？」
…（無言）…
「じゃあねえ、昨日何して遊んだ？」
…ガンダムを仲間にして遊んだ。
「誰？誰を仲間にして？」
たか…、あのね、ガンダムと、ポケモンと…
「あ、ガンダム？」
たか…、Tくんと、Kくんでやった。
「ほんとう。どこで遊んだん？」
あの川で遊んだ。
「川で遊んだん？そうかぁ。」
小さいかえるがずっと前おったところ。
「へえ、面白かった？」
うん。

【年長女兒 1】

「昨日あったことをお話ししてくれる？」
きのう？きのう？
「うん。」
きのうはさおに…。
「じゃあ昨日、何して遊んだ？」
うんとねえ。…スクーターで遊んだりー、
「うんうん。」
スクーターで遊んだりー、う～んとお、
花いちもんめしたりー…
「へえ、ほんとお。」
…それだけ。
「誰と遊んだ？」
んと…Iちゃんと、Rちゃんと、Kちゃんと、Y
ちゃんと、Mちゃんと、んと、あとMちゃんと…
「おー、いっぱい遊んだんじゃなあ。」
んと、Aちゃんと…
「すごい。」
それだけ。

【年長女兒 2】

「昨日あったことをお話ししてくれる？」
きのうね、Fちゃんとね、1時間ね、
ウォーリーのね、ね、絵をね、描いてた。
「へえ、すごい。どこで？」
んー、部屋の中で。
「幼稚園の？」
うん。Fちゃん、あそこ。（と指差す）
「ふ～ん。」
Fちゃん、Kちゃんの方が好き。

行為の考察にもあるように、年中児は、“幼稚園で遊んだ”ことは語るが、それ以上を積極的に語ろうとはしない。もしくは、遊びの具体例を挙げたとしても、典型的なものに限られる傾向がある。今回の調査においては、男児の“忍者ごっこ”や女児の“おままごと”がそれであった。彼らは1つの遊びを1日中続けているわけではなく、他の様々な遊びにも参加しているはずである。しかしながら、想起に際してまず口に上るのは“おままごと”のような遊びの典型例であった。対して、年長児の遊びは、ガンダムを仲間にした遊びや、スクーター、花いちもんめ、お絵描きなど、バラエティに富んでおり、突出して出現頻度の高い遊びは見当たらない。もちろん、加齢に伴う遊びの分化という要因も見落としてはならない。しかし、年中児の語りにみられる傾向をそうした要因だけで説明することは無理であろう。年中児には、“昨日幼稚園でした遊び”は存在せず、それらは普遍的な“幼稚園スクリプト”に組み込まれているかのようなのである。しかし、年長児になると、昨日の遊びがエピソードとして浮かび上がってくる。昨日は今日でも明日でもない1日として存在し始める。昨日は他の誰とも同じではない、自分だけの昨日となる。

登場人物に伺える年齢差も、具体例で確認してみたい。年中児は、概ね“みんな”“お友達”といった集合名詞を用いて語る傾向にある。対して年長児は、複数名の幼児の名前を列挙する。年中児が幼稚園を語ろうとするとき、そこで出会う友達は幼稚園にいる他者一般に変貌する。年中児にも特定の友達関係が存在する(例えば Hinde, Titmus, Easton, & Tamplin, 1985)にもかかわらず、語りには登場し得ないかのようなのである。対して、年長児にとっての友達は、昨日も遊び、そして今日も明日も一緒に遊ぶであろう友達である。それを確実に想起し、そして語るができる。(幼稚園での)昨日の自分が存在し始めると同時に、(幼稚園での)昨日の友達も存在し始めるの

である。

2. 幼稚園での行事

【年中男児】

…中略…

「じゃあねえ、何して遊んだ？」

う～ん…今？

「う、うん、昨日。」

昨日？え～と……いも掘りした。

「いも掘りしたん。ほんまぁ。」

うん、いも掘りした。

「それから？」

え～と、それとー、なんかの……となんかで遊んで、なんかお友達のお母さんが来てね、おかしあげた。

【年長女児】

「昨日あったことをお話ししてくれる？」

…しんたいそくてい。

「身体測定があったん？」

(肯く)

【年長女児 1】

「昨日あったことをお話ししてくれる？」

ん？きのうね、カレー食べてね、2杯おかわりしてね、それでね、あの、それでね、残して、家で食べようとしたんだけど、ママがもう時間がないからやめときって言って、そいでママが食べた。

「カレーどうじゃった？」

おいしかった。そんで、つけもんつけた。食べんかったん？

「食べたよ、大学で。」

だいがくー。だっさいだいがくー。

だいがくはYちゃん入れんー。

【年長女児 2】

「昨日あったことをお話ししてくれる？」

なんで？なんで、お話しなきゃいけないの？

「Aちゃんとお話ししたいから。」

きのう？きのうねー…、折り紙とかー、

(Rが持っているフラフープを指さして)

Rちゃんが持ってるあれとかー、遊んだりした。

そして、あのねー、あのねー、

かくれんぼとかしたりねー…。

「なんか作らんかった？」

たまねぎしたりー…。…カレー作った。

カレーパーティー来んかったん？

「うん。」

すごいおいしいんよ、甘くって。

「そうじゃね、おいしかったね。」

もう食べたん？きのうならねー、いっぱい先生が来たんよ。

年中児も、幼稚園での“特別な行事”であれば、“翌日に”想起できる場合もあるが、彼らの語りは行事名を挙げて早々と終了する。年中男児の事例にあるように、こちらからの促しに応じるかたちで想起をする場合もあるが、そのやりとりからも昨日を詳細に語ることの困難さが伺える。対して、年長児の語りに見受けられる自発性と精度には目を見張るものがある。自発性については、特に「食べんかったん？」(年長女児1)、「もう食べたん？」(年長女児2)という質問の登場にも注目したい。年中児の語りでは、質問は専ら収集者の促しに見受けられるに留まっていた。質問は、概して相手からの返答を期待したうえで発せられるものである。年長児の語りでは、他者とのやりとりを念頭に置いた質問が投げかけられているのである。“語り合う”共同者としての他者が機能し始めている。ここに、社会性を伴った想起の始まりを見出すことができよう。

一方、語りの内容をみると、年長女児1の描写力たるや、まるでついさっき起こった出来事であるかのように鮮やかなものである。その場の雰囲気までもまざまざと感ぜられる。彼女の想起に息吹をもたらしているのが、「ママがもう時間がないからやめときって言って」という会話表現であろう。会話表現は描かれた世界に生き生きとした力を与える効果を持つものである。また、年長女児2の「すごいおいしいんよ、甘くって」という評価的なコメントが自発的に語られていることも見逃せない。量的分析を行ってはいないものの、加齢に伴って評価的情報が多く語られる(Umiker-Sebeok, 1979)傾向は、本研究においても伺えた。評価は、出来事の個人的重要性を具体化するときの核となる(Fivush et al., 1995)ものである。評価が語られるということは、出来事に個人的重要性が付加され始めている、想起される出来事とそれに関与した自分とが深く結びつき始めているといえるであろう。例えば、年中児においては、“カレーパーティー”という出来事の想起場面で“カレーをおいしいと感じている自分”を認識することは難しいのかもしれない。想起される風景は自分の目から見た風景であり、そこに自分自身の姿はない。しかし、加齢に伴い自分自身を視野に捉えることが

可能となる。幾分鳥瞰的な視点から、“カレーをおいしいと感じている自分”をも見るができるようになる。自分自身を主人公とした語りが生き生きと展開され始めるのである。

3. その他の場所での出来事

【年中男児】

「昨日あったことをお話ししてくれる？」

おま…おまつり。

「おまつりがあったん？どこで？」

さ、さ…さけまつり。

「あ、酒祭り行ったんじゃ？誰と？」

え？お母さんと、ねえ、えとねえ……、

お母さんとねえ、Rくん。

「ほんとう。面白かった？」

うん。

「なんか買った？」

ん？

「なんか買った？」

…（無言）…

「なんも買わなかったんじゃ。」

買った。

「何？」

剣とヨーヨーとね、んとね、車。

【年長女兒】

「昨日あったことをお話ししてくれる？」

きのう？何曜日。

「昨日？何曜日かな…昨日は月曜日。」

…きょう…きのうは柔道した。

「柔道！？すごい。誰と行きょうん？」

…お母さんと。

「お母さんも柔道しょうん？」

おかあ…お母さんは、連れていってくれる。

「連れていってくれるだけ？」

お父さんか誰かがしょうるけん？」

…先生が教えてくれるだけ。

「あ、ほんとう。いつから行きょうん？柔道。」

8月から。

「すごいなあ。へえ、柔道好き？」

（肯く）

「ふ～ん。……それから？」

それから、火曜日は一…日曜日はね、

あの一、テレビで…テレビで…った。

「テレビで何？」

出た。

「出た？なんで？さけ…酒祭り？」

うん、そうそう。

「ふ～ん。」

それで、火曜日は…ですけど、もう今日はお休み。

それで……それでねえ、水曜日がねえ、

ばあちゃんち。それでもねえ、柔道も行く。

「すごいなあ。」

…それで、ばあちゃんち…。

「ふ～ん。」

それとねえ、木曜日はプール。

「すごいなあ。」

きのうはねえ、血が出てこけた。

「血が出た？血が出たん？」

うん。ここ。ここ…めくってみ。

「あ、これ？これ柔道？」

これ柔道じゃない。

「これなんで？」

シップはったけん。きのう血が出た。

…あのねえ、金曜日にまた柔道がある。

（聞き取りにくかったので）「水曜日？」

じゅう…金曜日。金曜日と月曜日と金曜日。

「ふ～ん。柔道ねえ、Mちゃんみたいなねえ…」

早く言って。

「ちっちゃい子はおらんのんじゃないん？あんまり。」

おるよ。柔道だって。なんか1歳ぐらいか

2歳ぐらいか…

「1歳？」

うん。

「1歳って赤ちゃんよなあ。」

うん、おるよ。

…中略…

あのねえ、土曜日ねえ…あのねえ…

プールに行った。

「ほんまあ。」

それでねえ、Rちゃんのお友達に会った。

それで木曜日ねえ、お祭りがあった。

その朝もお祭りがあった。

あのねえ、日曜日にねえ、広島行こうと思ったら

ねえ、ちょっと大変なことが起こった。

「起こった？何があった？何？大変なことって？」

あのねえ、人にねえ、ぶつけた。…ちゃった。

「は！？ぶつけちゃった？車？」

うん。

「ほんとう。」

大変なことが起こった。

年中男児は、“酒祭り”という出来事に言及することはできるが、それ以上を語るができない。収集者からの促しを契機として、“誰とどこで何をしたか”という語りの骨格が組み立てられていく。彼らは、収集者からの促しがないと想起を続ける努力を放棄してしまう傾向にある。それは、想起して語ることの必然性を自覚していないからかもしれない。一方、年長女児の事例は、本研究で得られた最も長い語りである。興味深いのは、昨日についての語りが自分自身についての語りへと変貌していく様子である。昨日の想起に留まっていなかったため、昨日を詳しく伝えることには成功していないかもしれない。しかし、想起の対象が自発的に広がりや深まりを伴っていくという事例は、他には見当たらないものである。彼女は、自分自身を語り始め、そして語ることを楽しみ始めている。語りは彼女のものとなり、彼女自身を伝える役割を付与される。

さて、彼女は自分の語りをきっかけとして連鎖的に想起を広げていると思われる。その一つに“柔道”から“プール”へという連鎖が挙げられる。それはまるで、“お稽古ごとネットワーク”の活性化の経路をたどっているかのようである。ある出来事が想起されると、そこにリンクされている出来事が順々に意識に上ってくる様子が想像される。そのネットワークの存在が、語りの内容を豊かにする一因となっているとも考えられよう。ただ、そのネットワークは意味記憶の特色が色濃く、エピソードの想起とは捉えにくいことに気がつけたい。しかし、彼女は、そうしたネットワークの活性化の合間に、“お祭り”や“日曜日起こった大変なこと”という単発的なエピソードの想起にも成功している。以上のことから、より想起しやすいのは、やはりある程度ネットワーク状に整理された出来事であるように思われる。しかし、彼女はネットワークから外れたエピソードを引き上げるちからも備えており、それらを語る態勢が芽生え始めていることが推測されよう。

考 察

本研究は、幼児が昨日の出来事を語るときの想起傾向を探ることを目的とし、以下の仮説を立てた。年中児は、“幼稚園スクリプト”に含まれるような園生活の日々のルーティンを受動的に想起するのに対し、年長児は、“幼稚園スクリプト”を離れたより個別のエピソードを能動的に想起するというものである。語りを分析する観点、語り行為が能動的か受動的かという自発性と、語り内容が幼稚園スクリ

プトに留まっているか否かという解放性の2点であった。

語り行為の自発性については、以下のような年齢差が認められた。年中児は、収集者との一問一答に終始し、また、収集者からの質問や促しがないと語りを放棄する傾向にあった。対して年長児は、何のように語ればよいのかという語りの骨組みを意識し、自発的に語りを続けるといえるであろう。以上の傾向から、自伝的記憶発生の臨界期と語りの自発性の萌芽期が重なることが推測される。また、Fivush et al.(1995)は、イベント記憶が自伝的記憶になるには、記憶を語り合うことばと語り合う場が必要であると提言した。本研究の結果から、家族以外の他者に対して自身の経験を語るという行為が身につき始めるのは、幼稚園年長児からと考えられる。従って、少なくとも、園生活に関する自伝的記憶の萌芽は、この時期から認められるのではないかと推測される。

語りの収集に際して実際に子どもたちとやりとりを行ったときに、次のような印象を得た。それは、年長児が“経験した出来事を相手に語る”という行為を当然のごとく受け入れ、自分の責務を“楽しんで”遂行しているかのような印象である。この時期に、語りの態勢が整い始め、彼らはその態勢を試すことに積極的であるのかもしれない。

次に、語り内容の解放性について、以下のような発達の変化が見受けられた。年中児は、幼稚園と友達と遊びとをスクリプト様式で想起するために、各幼児に特有の想起内容が語られにくい傾向にある。対して年長児は、幼稚園での遊びに関しては、その内容がより具体的且つ個別的になり、加えて場所や行為において、幼稚園に制約されない各人各様のバリエーションが出現するといえよう。幼稚園スクリプトの獲得と期を同じくして、幼稚園に引きずられない“昨日”が想起される始める。そうして、想起可能な出来事が他者とのあいだで語られ、語られた出来事が自伝的記憶の一部となっていくのであろう。

今回は、幼児に“昨日”が存在し始める過程の考察に重点を置いた。今後は、同年齢の幼児同士が過去の出来事について語り合う様子を探り、“昨日”や“過去”の出来事が社会的に共有されていく過程を検討する必要があると思われる。

引用文献

- Eisenberg, A. 1985 Learning to describe past experience in conversation. *Discourse Processes*, 8, 177-204.

- Fivush, R. 1984 Learning about school: The development of kindergartners' school scripts. *Child Development*, 55, 1697-1709.
- Fivush, R. 1988 The functions of event memory: Some comments on Nelson and Barsalou. In U. Neisser & E. Winograd (Eds.), *Remembering reconsidered: Ecological and traditional approaches to memory*. New York: Cambridge University Press. Pp. 277-282.
- Fivush, R. 1991 The social construction of personal narratives. *Merrill-Palmer Quarterly*, 37, 59-82.
- Fivush, R., Gray, J. T., & Fromhoff, F. A. 1987 Two year olds talk about the past. *Cognitive Development*, 2, 393-410.
- Fivush, R., Haden, C., & Adam, S. 1995 Structure and coherence of preschoolers' personal narratives over time: Implications for childhood amnesia. *Journal of Experimental Child Psychology*, 60, 32-56.
- Fivush, R., & Hamond, N. 1990 Autobiographical memory across the preschool years: Towards reconceptualizing childhood amnesia. In R. Fivush & J. A. Hudson (Eds.), *Knowing and remembering in young children*. New York: Cambridge University Press. Pp. 223-248.
- フロイト, S. 井村恒郎・小此木啓吾 (訳) 1970 隠蔽記憶について 井村恒郎・小此木啓吾・懸田克躬・高橋義孝・土居健郎 (編) フロイト著作集6 人文書院 Pp. 18-35.
- 藤崎春代 1995 幼児は園生活をどのように理解しているのか: 一般的出来事表象の形成と発達の变化 発達心理学研究, 6, 99-111.
- Hinde, R. A., Titmus, G., Easton, D., & Tamplin, A. 1985 Incidence of "Friendship" and behavior towards associates vs nonassociates in preschoolers. *Child Development*, 56, 234-245.
- Hirst, W., & Manier, D. 1996 Remembering as communication: A family recounts its past. In D. C. Rubin (Ed.), *Remembering our past: Studies in autobiographical memory*. New York: Cambridge University Press. Pp. 271-290.
- Howe, M. L., & Courage, M. L. 1993 On resolving the enigma of infantile amnesia. *Psychological Bulletin*, 113, 305-326.
- Hudson, J. A. 1990 The emergence of autobiographic memory in mother-child conversations. In R. Fivush & J. A. Hudson (Eds.), *Knowing and remembering in young children*. New York: Cambridge University Press. Pp. 166-196.
- 松島恵介 1994 生涯最初の記憶 教育と医学, 42, 1006-1012.
- Nelson, K. 1988 The ontogeny of memory for real events. In U. Neisser & E. Winograd (Eds.), *Remembering reconsidered: Ecological and traditional approaches to memory*. New York: Cambridge University Press. Pp. 244-276.
- Nelson, K. 1996 *Language in cognitive development: Emergence of the mediated mind*. New York: Cambridge University Press. Pp. 152-182.
- Pillemer, D. B., & White, S. H. 1989 Childhood events recalled by children and adults. *Advances in Child Development and Behavior*, 21, 297-340.
- Sheingold, K. & Tenny, Y. J. 1982 Memory for a salient childhood event. In U. Neisser (Ed.), *Memory observed*. San Francisco: Freeman. Pp. 201-212.
- 高木光太郎 1996 記憶:なぜ日常なのか 日本児童研究所 (編) 児童心理学の進歩 1996年版 金子書房 Pp. 57-80.
- Umiker-Sebeok, D. J. 1979 Preschool Children's intraconversational narratives. *Journal of Child Language*, 6, 91-109.
- 矢野喜夫 1988 幼い時代の記憶 岡本夏木 (編) 認識とことばの発達心理学 ミネルヴァ書房 Pp. 232-262.

謝 辞

本研究は、平成9年度広島大学大学院教育学研究科における幼児心理学実地研究での研究報告を加筆・修正したものです。ご指導を賜りました広島大学山崎晃先生、深田昭三先生に厚く御礼申し上げます。また、本研究にあたりご協力を賜りました広島大学附属幼稚園の諸先生方及び園児の皆さんに心より感謝申し上げます。